

福岡大学の共通教育中国語二年次用テキストについて¹

— 講読用教材を中心に —

宮 下 尚 子

(福岡大学共通教育研究センター外国語講師)

0. はじめに

小稿は、福岡大学の外国語講師荒木雪葉と宮下尚子によって共同編集され、2018年度から荒木と宮下それぞれのクラスでのみ試験使用を開始した福岡大学の共通教育第二外国語の中国語二年次講読用テキスト(『福岡旅情故事』)について、その編纂の経緯と必要性、内容に関する言語的な問題と言語外的問題、福岡大学で既に使用されている他の統一テキストとの関連について、今後の展望の模索をするため問題を整理しつつ論じたものである。

1. 二年次用共通テキストの導入の必要性

現在、日本の大学の共通教育第二外国語の中国語教育では、初年時には大学側が共通テキストを指定する場合もあるが、二年次まで履修する学生は相対的に数が少ないので、第二外国語としてクラス単位で学ぶ場合、テキストは一般に既存かつ市販の準中級用テキストや中級用テキストの中から講師がクラスのレベルに合わせて任意に選定を行う場合がほとんどではないだろうか。

福岡大学では平成27年度より共通教育第二外国語中国語のための一年次用の統一教科書を導入している。この背景に、福岡大学の共通教育第二外国語中国語の一番の問題点でもあり特徴である履修者数と開講クラス数の多さがある。統一教科書が導入される以前の状況と展望について、甲斐2006は以下のように述べている。

各教員がテキストを自由採択している(2006年当時:引用者注) 本学共通教育中国語の問題点としては、1年で各教員が採択するテキストが異なるので、終了時の実力に差が出てしまい、2年に上がってIIABのクラスを組んだとき、各クラスから集まった学生の実力がばらばらであるという状況を指摘で

きる。よって、教科書の統一による水準の確保が望まれるのだが、それはきちんとした水準を持ち、且つしっかりした基準に添ったものでなければ、各教員に納得して使ってもらうものにはできないし、また学生も納得しないだろう。(甲斐2006:7)

王・甲斐・間(2016)によると、平成27年度の中国語登録者数は2,847人であり、ドイツ語の1,171人、フランス語の777人、スペイン語の584人、朝鮮語の833人を大きく上回る。二年次用の開講クラス(II)を合わせた登録者総数は3,367名となり、第二外国語登録者総数(のべ7,801名)の43%を占める。また、開講クラスは、平成27年度では91クラス(1クラスの平均学生数は37名)であった²。そのような背景の下、教学環境の充実の一環として、受講生に中国語教育の客観的な到達度を提示し、質の保証を行うために、教学内容を統一化すること、すなわち、統一シラバスの提示と統一教科書の導入が順次図られるようになった。

二年次における中国語共通教育のカリキュラムは、人文学部で必修であり、IIA(会話中心)とIIB(文法と講読)を計60校時受講しなくてはならない。幸い、すでに福岡大学では、一年次用の初修テキスト『漢語課本』の他、二年次用の統一テキストとして準備されている会話テキスト(平成29年度『漢語課本II』試用本、平成30年度は『漢語課本II』)が一部の専任教員の授業で試験的に導入開始されている。IIB(二年次講読クラス)に関しては、2017年当時まで、大学独自のテキストというものはまだなく、各教員が独自に選定したテキストが使用されている現状であった。二年次用講読のテキスト導入も会話テキストの導入に並行して行うほうが学習の効率が良い。講読用テキストの導入が急がれる理由である。

¹ 本稿は2018年5月13日に福岡大学で行われた第66回九州中国学会大会での発表を修正・加筆したものです。一緒に発表をした福岡大学の荒木雪葉先生、司会を担当していただいた九州大学名誉教授の岩佐昌暉先生をはじめ、御助言いただいた福岡大学人文学部甲斐勝二教授、問ふさ子教授および関係各位に感謝申し上げます。

² 受講者数及び開講クラス数のデータは王・間・甲斐2006:204による。

2. 二次用テキストの現状と課題

2.1 IIAとIIBの役割分担

福岡大学では共通教育第二外国語の中級向け教材として講読用テキストを編集しようという取り組みがかなり以前から行われていたが、過去に散発的に教材編纂が試みられたものの、結局、体系的なものとしては育っていないとのことである（甲斐2003、甲斐他2003、甲斐2006等による）。

共通教育第二外国語中国語の二次のカリキュラムは、先に述べたように、人文学部で必修であり、IIAとIIBを計60校時受講しなくてはならない。II（IIAとIIB）の概要について、シラバス作成時に共通教育センターより配布される資料では次のように説明する。

◎中国語IIA・IIB（理学部・工学部の科目名は中国語II）（応用）

この授業は、中国語IA・IBで基礎を習得した学生を対象に、複雑な文章や長文の読解・作文などを総合的に学習する。実際の授業は担当教員がクラスの学力に応じて考える。

受講生は辞書をよく調べ、教科書に付いているCDなど音声教材を繰り返し聞き、例文や文章を何度も朗読して、中国語のリズムや中国語的発想法を身につけたい。そうすれば、修了後も辞書を活用しながら自分で継続学習することができるようになるはずだ。（後略）

残念ながら、上記「概要」では、IIAとIIBが「中国語IA・IBで基礎を習得した学生を対象」にしたより高いレベルの中国語を習得することを目的としているという点以外は、IIAとIIB二つのクラスがそれぞれが互いにどのように役割分担をしているのか、あるいは相互補完するかは明確にされていない。しかし、IIAとIIBは学科毎に予め決められたクラスしか受講できず、IIAとIIBを異なるセットで受講するのは原則上許されていないことから、やはり単なる名称の違いだけではなく、講座の中身によっても分担されることが想定されていると考えられる。第二外国語のIIA・IIBクラスの役割分担に関する大学側の公式な見解を反映するものとしては、シラバスがある。福岡大学の共通教育第二外国語の中国語については、IA・IBは既に統一シラバスの導入により、センターで事前入力されているが、IIA・IIBについても、2018年現在統一教科書（『漢語課本II』）を使用しているクラスに関しては、現職の専任が統一シラバスを作成する。それによると、IIAの概要は次のようである（下線は引用者による）。

□概要

中国語IIAでは、一年間の中国語の学習に引き続き、基本的な文法の要点を学ぶ。語彙や構文、表現等を増やし、さらに中国語でコミュニケーションができることを目指している。

週1コマの授業で1冊のテキストを1年間で終わる。話す・聴く作業を中心に、日常生活に必要な会話表現をさらに充実させる。勉強した単語や文型を使って、自分の言いたいことを表現する能力を鍛える。

□到達目標

自分の身の回りのことで些か複雑なことがらを習得した中国語で表現できるようになる。（技能）

中国の社会・文化事情への視野を広め知識を増やす。（知識・理解）

中国語学習を通じて異文化に対する興味・理解を深める。（態度・志向性）

IIAはやはり会話（コミュニケーション）重視であることがわかる。IIBについては、まだ統一シラバスによる事前入力という形式は存在しないが、IIBテキスト編集に携わる際に、講読用のテキスト、という大まかな指示を、共通教育中国語の管理運営を担当する東アジア地域言語学科の専任教員より受けているので、IIBは講読中心の授業であるとおおむねみなしてよからう。

2.2 IIA・IIBのテキスト選定

ここでは、現在のIIAとIIBの授業でどのようなテキストが選ばれているかを見ることにする。クラスの実力にもよるが、選ばれているテキストを見ることで、教員がそのクラスの実力をどのように判断しているか、そこでどのような授業を展開しようと考えているかという方向性のようなものが見えてくるからである。

IIA（おおむね会話中心）の教材としては、2017年度から『漢語課本II（試用版）』（趙葵欣著、朝日出版社）が専任教員の授業で試用開始された。2018年には改訂されて『漢語課本II（改訂版）』（趙葵欣、董玉亭著、朝日出版社）として専任教員のIIAクラスで用いられている。2018年に専任教員以外のクラスで用いられているIIAのテキストは以下のとおりである（全12クラス開講。うち7クラスは専任教員が担当）。

- 『中国ってどんな国？』張継濱、小川文昭（白水社）2017年。
- 『学ぶ中国語 初中級編』王亜新、劉素英（朝日出版社）2016年。
- 『中国語のおもてなし—問答ペアワークで会話練習』本間由香利、蘇紅（郁文堂）2017年。
- 『中国語 つぎへの一歩』尹景春、竹島毅（白水社）2010年。
- 『二年生のコミュニケーション中国語』劉穎（白水

社）2002年。

IIB（おおむね講読中心）では、2017年度には大学独自のテキストはなく、各教員が独自に選定したテキストを使用していた。IIBでは、荒木雪葉および宮下のクラスのみで試用テキスト（『漢語課本IIB 福岡旅情故事』）を使用し、他のクラスではそれぞれの教員が任意のテキストにより授業を行っている。

今年度（2018年4月～）のシラバスによると、IIBは全12クラス開講されている。それぞれのクラスで選定されたテキストは以下（a～h）である：

- a 『遊びながら学ぶ ハピネス中国語』 相原茂等著（朝日出版社）2010年。
- b 『新版 中国語さらなる一歩』 竹島金吾監修（白水社）2002年。
- c 『二年生の中国語』 南勇（朝日出版社）2016年。
- d 『中国って どんな国？』 張継濱、小川文昭（白水社）2005年。
- e 『日中異文化の出会い—中級へのステップアップ』 中桐典子ほか著（三修社）2018年。
- f 『中国語中級テキスト 大学生のための現代中国語 12話・4』 黄漢青、杉野元子著（白帝社）2015年。
- g 『話す中国語 初級～中級篇』 薫燕、遠藤光暁著（朝日出版社）1998年。
- h 『中級コミュニケーション中国語121文』 胡山林（九州中国語研究会）出版年不明。

中国語のIIAおよびIIBは主に人文学部の学生を対象に開講されているが、テキストは講読用あり、会話用もありで、IIBを受講することでどのような能力をつけることが期待できるかという見通しにまだ統一した見解はなく、統一シラバスも存在しない。現在のところ、福岡大学における共通教育の第二外国語中国語は、二次までの開講であるので、二次において一年次のようにレベルを揃えて次の学年に備えるという作業は必要ないのかもしれないし、また、それぞれの先生方に納得のいくテキストを使って気持ちのよい授業を行っていただければ

それが学生のためにも一番良いことなのかもしれない。しかし、最低でもIIAとIIBという二つのクラスをセットで選択しなければならないカリキュラムにおいて、2つのクラスでそれぞれの教員が恣意的にテキストを選択し、それぞれの進捗で授業を行うことは、やはり学生にとっては負担ばかりが大きくなるかもしれない、体系的な語学教育がなされているとは言い難い。また、選定されたテキストのレベルや傾向、文法の配列順序が二者間でばらばらであれば、学生の負担がより大きくなるのが想定される。

また、中国語は書面語（書き言葉）と口語（話し言葉）の乖離が大きい言語であり、文章を読むにはそれなりの訓練が必要である。大学生のように、ある程度母語の能力が定まってから第二外国語を学習する際には、会話と講読をバランスよく学習することが外国語上達のために不可欠である。そのためにも、やはり、IIA（会話）のテキストとレベルや文法の出現順位を揃えた大学独自の事情に配慮したテキストの整備が喫緊の課題である。

2.3 屋上屋を架すことの意義

1990年以前、現在のようにコンピュータが普及する以前は、出版社が中国語のテキスト業界に入り込めるかどうかは、中国語の簡体字が揃っている印刷所と取り引きがあるかどうか全てであったと言う。教科書の選択の幅も現在ほど多くはなかったと想像できる。しかし、現在ではパソコン等の普及によって教科書の編集は以前に比べて容易になり、また、履修する学生も増え、大学のレベルや学部学科によって必要とされるテキストは多岐をきわめている。既に多くの中国語テキストが出版されている現状にあって、敢えて大学独自の一冊をつくらねばならない理由は何であろうか。それはやはり、一年次との学習内容の継続と補完、および、学生が大学に求める質の保証という点に尽きるのではないだろうか。

以下は、2018年現在、日本でおおまかに入手可能な中国語中級用の講読用テキストである。

資料 日本で発行されている主な中国語中級講読用テキスト

	出版社	タイトル	著者	発行年度	頁数	中級の定義、テキストの特色など（抜粋）
(1)	白帝社	『新版中国之窗』	村松恵子 前田光子 董紅俊	2017	24課 126頁	<u>初級終了後の中上級読解力を養成するための講読テキスト</u> 。6編に大別し、「中国」に対する理解を深めることを目的とする。主な内容：[城市篇] 北京／上海 [社会・世态篇] 让一部分人先富起来／房奴、车奴和卡奴 [历史遗产篇] 万里长城 [历史人物篇] 孔子／秦桧 [成语篇] 卧薪尝胆 [中日交流历史遣隋使与遣唐使／1972年的中日邦交正常化

(2)	白帝社	『中国語作品読解』	岩田憲幸	2013	98 頁	文学作品を通して中国人の心にふれ、中国・中国語への関心と理解を深めるために編まれたテキスト。老舎<養花>と魯迅<藤野先生>を収録。読解の助けとなるように適宜詳しい注を付す。
(3)	白帝社	『中国文化 15 話』	上野恵司監修 顧莉	2014	130 頁	<u>中検 2 級レベル以上を目指す学習者の、聴解力・読解力・表現力を養う。(上級向け?)</u> 中国の神話、歴史遺産、伝統、食文化等をテーマとした文章体による 15 課の課文からなる。①語句の聴き取りのとの意味の確認、② 680 字程度の課文のリスニング内容に関する 4 択式質問 ③表現のポイントの学習と課文の読解、④リスニング中心の豊富な練習問題。
(4)	朝日出版社	『知ってる?今の中国 ～衣食住遊～』	山下輝彦 路元	2018	85 頁	本書は、かつて米国に在住経験もあり、長年主に対欧米人の中国語教育に携わって来た元新華社の記者に現在の中国社会を海外に紹介する文章を依頼、グローバルな感覚を持つ元ジャーナリストの視点からの鋭い観察力と洗練された文章で現在の中国の様子を紹介しています。
(5)	朝日出版社	『読む中国語』	遠藤光暁 董燕	1999	87 頁	『話す中国語』の姉妹篇でやはり <u>バリエーションを中心的な設計思想とする離乳食としての中級教材</u> 。学生の実態にフィットした易しく短い本文を暗記するまで深く消化することを目指します。ゆるやかな傾斜で基本的な文法事項を丁寧に浸透させ、最後の課で魯迅の雑文に到達します。これならギブアップする学生を作りません。
(6)	朝日出版社	『ことばと文化 一挙両得 中級中国語』	陳淑梅 陸薇	2017	14 課 104 頁	<u>初級中国語を終了した学習者が、さらにステップアップするための中級向け教材です</u> 。会話と読解をバランスよく学べるよう以下の工夫をしました。1) 本文①は文章形式、本文②は学習者が問いに答えて完成させる対話形式で、一コマの授業で習得できる文章の長さや内容に構成されています。2) 異文化を話題に 中国人と中国語でコミュニケーションを取るためには、話題が必要です。学生が興味を持ちやすい話題を 14 課分厳選しました。
(6)	光生館	『中国語中級テキスト楊逸エッセイを中国語で読む!』	篠原征子	2000	88 頁	①課文の語彙、文法事項は日常会話での使用頻度が高いものを用いた。② <u>初級段階を終えた学習者が無理なく課文を読めるように</u> 、文脈に沿った語注を多く付けた。③課文に出て来る重要な文法事項は「ポイント」で取り上げ、簡潔に説明し、実用的な例文を挙げた。④各課の最後で再度要点を押さえ、しっかり復習ができるように、練習問題を付けた。
(7)	光生館	『中国語中級テキスト上海だより』	山川英彦	2003	46 頁	庶民生活を紹介した新聞記事をいくつか集め、 <u>中級者向け</u> の読本とした。
(8)	光生館	『中国語中級テキスト最新中国小故事選集』	宮田一郎監修 閻紅生 地蔵堂貞二	1998	18 課 122 頁	課文全 18 篇はいずれも 1993 年以降、中国の新聞・雑誌に掲載された文章を、 <u>初級段階を終えた学習者向け</u> に改編したものである。
(9)	光生館	『中国 — 人と暮らし 中級中国語読解テキスト』	荒川清秀 趙煒宏 上野由紀子	1992	98 頁	日本で中国語を教えるある中国人女性教師が、異国にあって、家族、故郷、大学生活、結婚等を回想するかたちで本文が書かれている。学習者は本書を学ぶ中で、知らず知らずのうちに、中国の人々の考え方や生活を知り、あわせて日本の文化との違いにも思いを致すようになるであろう。

(10)	好文出版	『オーストラリアの風－在豪華人作家の「母国」点描－』	黄惟群著 柝内精子 何群雄 改編	2002	12課 78頁	現役の在豪華人作家の短編より12篇を厳選し、テキスト用として改編したもの。本書の特徴は、三次元の異文化交流にある。オーストラリアに移住した華人作家の視点で捉えた、同国の人々や風土を、我々日本人が中国語を介して垣間見る。語学から文学への橋渡しとしての役割をも担っている。
(11)	好文出版	『阿強的故事（アーチャンのものがたり）中国現代社会論』	相原茂 蘇明	2011	104頁	阿強の出世物語をとおり、変化の激しい中国のそれぞれの時代を俯瞰する。主人公が懸命に生きた物語を学ぶことによって、中国社会をより理解できるよう努めた。各課の本文に即した「現代中国社会論」で、中国の基本的な知識から社会事情まで、話題を選りすぐった。
(12)	好文出版	『新人新事』	李鴻谷	2005	80頁	変貌が著しい中国の最新事情のなかから、家庭の中の男女関係、教育問題、新しい女性像、流行風俗、流行文化、新消費文化などを取り上げる。 <u>初級文法を学習し終えた学習者が中国文を読む力を養成できるように工夫した。</u>
(13)	好文出版	『新・中国事情』	李鴻谷	2000	18課 72頁	中国人のものの見方や考え方を理解するために、中国の文化・風俗・習慣・食生活・家庭生活・嗜好などをテーマに、18の課文を提示。 <u>平易な中国文を通して、読解力を身につける。学習の便を考え、語釈・注釈を多少詳しくした。</u>
(14)	三修社	『日本人が知りたい中国人の当たり前』	林松濤 王怡韡 船山明音	2016	224	「餃子を皮から?」「夫が料理を?」「文化大革命って?」中国人の友達や先生に聞きたいけれど…。そんな今さら聞けない基本的なことから、長年勉強していても今ひとつ納得できないでいたことまで、100の疑問を解消します!
(15)	金星堂	『中国語読解のコツ』	本間史 張明傑	2014	12章 90頁	①題材は「日本 動漫 在中國」「 网上購物 」「 上下班高峰期 」など現代の中国にフォーカスしたものを厳選。②各課には“読解のコツ”が展開されており、学習者の読解力養成に大いに役立つ情報を載せています。③今までの講読教材と違い練習問題も多く用意しているので、学習者のモチベーションを維持しながら進めることができます。
(16)	金星堂	中級中国語教科書『心に残る中国語』	関西大学中国語教材研究会	2005	13章 92頁	中国の文学作品を通して中国語を学ぶことができます。「魯迅」から「氷心」「毛沢東」まで、様々な文章を集めました。 <u>語彙、文法項目、内容面で中級レベルに最適なものを選定してあります。</u>
(17)	白水社	『知っておきたい中国事情』	張明傑 吉田泰謙 相原里美 葛婧	2017	60頁	中国の大学生活、近年の社会事情、食事・結婚・贈答に関する習慣など、中国理解のための基礎知識を紹介する <u>平易な読み物</u> です。
(18)	白水社	『変化する中国』	孟広学	2008	55頁	21世紀に入った後の中国社会に起きているいろいろな現象をできるだけ平易な中国語で書いた講読用のテキスト。 <u>初級段階を終えた学習者が無理な句は言っていけるように、文脈に沿った語注を多く付けた。</u>
(19)	三修社	『日中異文化の出会い—中級へのステップアップ』	中桐典子他	2018	88頁	<u>基礎から中級へと繋がる文法解説</u> 、発信力を強化する作文練習の問題A、本文と関連した会話を含むリスニング中心の問題Bを用意しました。(出版社HPより)

上の資料によると、管見の限り、どのテキストも初修後2年目の学生を想定しているようだが、ここにはいくつかの問題点がある。つまり、(a) 初修時にどのぐらいの学習を修了したのかわからない。週に1学時の大学もあれば、2学時の大学もある。また、難度どのぐらい

のテキストを用いたかによって、二次の学力にも差が出てくるのが考えられるので、一口に「中級」という用語で2年目の学生を括るのはあまり妥当とは言えないだろう。

(b) (a) の一年次の学習量とも関連するが、「中級」

という概念の規定があいまい(時間的なこと、文法的なこと、語彙的なこと、検定試験的な見方からのこと)であることが上げられる。どのようなレベルに到達すれば「中級」を自称あるいは判断できるようになるのだろうか。甲斐2006では次のように述べている。

「実は、中国語教育に携わるようになり、年度末に来年の新年度用に山のように届く見本のテキストには、ほとんどその到達基準が表明されていない。その作成水準は概ね経験的な水準であるといってよい。」(甲斐2006:7)

「本学の共通教育のように1年でIABを学び、2年でIIAB(AとBで教員が異なり教材も異なるようにしてもらおう)を学ぶというように、階梯を上って行くことを意識して編輯された系列性をもつテキストとなるとぐっと少なくなる」(甲斐2006:7)

2.2 「中級」という妄想

中国語について「中級」の概念について調べてみたが、明確な基準を謳っているものはなく、中国語検定試験やHSKに準じるということが一般的に想定されているようだ。

2007年には中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会より「中国語初級段階学習指導ガイドライン」(以下「ガイドライン」とする)が公刊された。これによると、初級の概念とは以下のとおりである。

「初級段階とは、大学における第二外国語で毎週2回(1回は90分)、2年間を通じて学んだ場合の、合計240時間(中国と同じ50分授業として計算すれば約200時間)の課程を考えている。」

同ガイドラインではこれに続く段階が「中級」として想定されている。おそらく日本における唯一の定義ではないだろうか。

これらのガイドラインの授業時間量を福岡大学の共通教育第二外国語の中国語にあてはめると、90分授業を毎週2回1年間学んだ段階では、 $90 \times 2 \times 30 \div 60 = 90$ (時間)となり、時間的には初級段階の半分にも到達していないということになる。つまり、福岡大学の共通教育第二外国語で『漢語課本』を学び終わった段階では、「ガイドライン」の「初級」の文法的な項目は達成されていないということになる。

細かい文法的な到達基準は明示されていないが、現在の日本で最も通用性があると考えられる到達レベル測定試験としては、中国語検定とHSKの二つが考えられる。これらの認定基準は以下のとおりである(ただし、どこからどこまでが「初級」「中級」という目安は示されていない)。

「中国語検定」は今のところ日本で最も通用性のあるレベル到達基準である。それによると、「認定基準」は以下のようにになっている。

資料C 中国語検定「認定基準」(中国語検定協会ホームページより)

	中検の認定基準
準四級	中国語学習の準備完了 学習を進めていく上での基礎的知識を身につけていること。(学習時間 60～120 時間。一般大学の第二外国語における第一年度前期修了, 高等学校における第一年度通年履修, 中国語専門学校・講習会などにおいて半年以上の学習程度。) 基礎単語約 500 語による発音(ピンイン表記)及び単語の意味, 日常挨拶語約 50～80 による語句・単文の中国語訳。
四級	中国語の基礎をマスター 平易な中国語を聞き, 話すことができること。 (学習時間 120～200 時間。一般大学の第二外国語における第一年度履修程度。) 発音(ピンイン表記)及び単語の意味, 常用語 500～1,000 による単文の日本語訳・中国語訳。
三級	自力で応用力を養いうる能力の保証(一般的事項のマスター) 基本的な文章を読み, 書くことができること。 簡単な日常会話ができること。 (学習時間 200～300 時間。一般大学の第二外国語における第二年度履修程度。) 発音(ピンイン表記)及び単語の意味, 常用語 1,000～2,000 による複文の日本語訳・中国語訳。
二級	実務能力の基礎づくり完成の保証 複文を含むやや高度な中国語の文章を読み, 3 級程度の文章を書くことができること。 日常的な話題での会話が行えること。 熟語・慣用句の意味, 語句の解釈, 500 字程度の中国語の文章の部分訳, 30 字程度の単文の中国語訳。

準一級	<p>実務に即従事しうる能力の保証（全般的事項のマスター） 社会生活に必要な中国語を基本的に習得し、通常の文章の中国語訳・日本語訳、簡単な通訳ができる。 （一次）新聞・雑誌・文学作品・実用文などからやや難度の高い文章の日本語訳・中国語訳、及び熟語・慣用句などを含む総合問題。 （二次）日常会話、簡単な日本語・中国語の逐次通訳及び中国語スピーチ。</p>
一級	<p>高いレベルで中国語を駆使しうる能力の保証 高度な読解力・表現力を有し、複雑な中国語及び日本語（例えば挨拶・講演・会議・会談など）の翻訳・通訳ができること。 （一次）新聞・雑誌・文学作品・実用文などから難度の高い文章の日本語訳・中国語訳、及び熟語・慣用句などを含む総合問題。 （二次）難度の高い日本語・中国語の逐次通訳。</p>

資料D 新HSK および『国際漢語教学通用過程大綱』における認定基準

『国際漢語教学通用過程大綱』孔子学院総部、国家漢辦編、北京語言大学出版社（2014）では、新HSKのレベル分けと合わせて以下のような6段階を設けている。筆記試験では初級、中級という用語は用いられないが、1-2級を「初級」、3-4級を「中級」と置き換えると、1-2級（1,200語）を本学共通教育中国語のIおよびIIの到達すべき最終目標とする。（以下、HSK日本の公式ホームページを参照した。）

級	試験の程度	語彙量の目安
6級	中国語の情報をスムーズに読んだり聞いたりすることができ、会話や文章により、自分の見解を流暢に表現することができる。	5,000語以上の常用中国語単語
5級	中国語の新聞・雑誌を読んだり、中国語のテレビや映画を鑑賞することができ、中国語を用いて比較的整ったスピーチを行うことができる。	2,500語程度の常用中国語単語
4級	中国語を用いて広範囲の話題について会話ができ、中国語を母国語とする相手と比較的流暢にコミュニケーションをとることができる。	1,200語程度の常用中国語単語
3級	生活・学習・仕事などの場面で基本的なコミュニケーションをとることができ、中国旅行の際にも大部分のことに対応できる。	600語程度の基礎常用中国語及びそれに相応する文法知識
2級	中国語を用いた簡単な日常会話を行うことができ、初級中国語優秀レベルに到達している。大学の第二外国語における第一年度履修程度。	300語程度の基礎常用中国語及びそれに相応する文法知識
1級	中国語の非常に簡単な単語とフレーズを理解、使用することができる。大学の第二外国語における第一年度前期履修程度。	150語程度の基礎常用中国語及びそれに相応する文法知識

同 口頭試験におけるレベル

級	試験の程度	語彙量のめやす
高級	中国語全般にわたる高度な運用能力を有し、流暢に自分の意見を表現することができる。週に2～3時間の中国語学習を2年以上行った学習者に適している。	3,000語前後の一般常用語彙及びそれに相応する文法知識
中級	中国語を母国語とする人たちと流暢に会話をする事ができる。週に2～3時間の中国語学習を2年程度行った学習者に適している。	900語前後の一般常用語彙及びそれに相応する文法知識
初級	中国語の基本的な日常会話を行うことができる。週に2～3時間の中国語学習を半年から1年程度行った学習者に適している。	200語前後の日常生活語彙及びそれに相当する文法的知識

このように、初級、中級という概念を分けるのは至難の業である。また、既成の「中級」用のテキストを本学の二次用に導入するためには、時間数の不足のほか、更に学習しなければならない文法事項等をどのように補填するかも考慮しなければならないが、中国語学や中国

文学等を専攻とする学科以外で、第二外国語を週に4コマ履修するカリキュラムというのはあまり現実的とは言えない。そこで、やはり本学（福岡大学）の事情を考慮した二次用のテキストの開発が必要なのである。

3. 「二次用」講読用テキスト編集へむけて

3.1 内容を方向づける

また、内容面においても、既成のテキストでは、中国の歴史文化情勢についての内容がほとんどで、日本や大学所在地のことを中国語で読んだり、発信しようと言う試みはなされていない。これは福岡の地理的条件とも関係があるのかもしれないが、福岡大学で中国の文学や歴史を専攻していないけれど中国語を履修する学生の多くは、別に海外に留学しようという志向を持っているわけではなく、時折町中でみかける中国人に何か話しかけてみたい、少し話ができたらどうだろうという内向きのあっさりした好奇心から中国語を選択する場合がほとんどである。そのため、中国固有の文物よりは、身のまわりのものを中国語でどのように表現するかのほうにより興味を持っている。このような傾向性があるからこそ、一年次用テキストである『漢語課本』は福岡を舞台として、「学習者のニーズに合わせ、初級レベルの自己紹介以外に、福岡大学での学生生活や福岡・九州の観光地の話題などを盛り込んで本学の学生に特化した内容で構成」している。

では、この福岡大学での使用に特化したテキスト『漢語課本』の講読用続編としてはどのような内容のテキストが相応しいであろうか。

過去の文学作品を採用したものは、レアリア³としての役割が期待できるが、それ以上に学習者のレベルに合わせた改編が必須である。その場合、テキストとして量的にふさわしいものから作品を選ぶという制約が更に生じる。量や難易度の制約にとらわれないためには、原テキストの長さの調整、語句の選定や入れ替えをしなければならず、そうなると必然的に著作権⁴の問題に向き合わねばならない。著作権の切れた作品であっても、文学作品を読む、という態度上、原著者の意向を確認しないままの改編は果たしてどうなのかという問題が常につきまとう。

現代事情を紹介するテキストにおいても上と同様の問題が生じかねない。新聞のコラムやインターネットの記事の抜粋の場合はやはり著作権の問題を考慮しなくてはならない。また、動きの激しい中国社会の「現代」事情は題材として古くなりやすく、数年前まではそうだったが今は違う（住宅事情や携帯電話事情、結婚事情、出産育児進学事情等）ということが生じ易い。自分で現代事情についてのテキストを編む場合も同様である。「同時代」性を重視するあまり、頻繁に書き換えや改訂をすることは、講読用テキスト作成の本来の目的（「教育」

が目的であって、教科書の編纂はあくまで教育のための手段である）ではない。

中国の古典や歴史、伝統についてのテキストはテーマが普遍的なので教材としての安定感があるが、学際性、幅広い専門科目との橋渡し、専門を越えたツールとしての語学という観点から、多彩な学部学科の多くの学生が自らの専門と関連づけつつ興味を持つのは難しいのではないだろうか。

以上のような事情から、荒木と宮下は既存のテキストを「発掘」するよりは、やはり大学の事情に合わせて独自のテキストを新たに編纂するに至った。次節では、内容面についての検討を行う。

3.2 初年度テキストとの連続性を保持する

二次用テキスト編集のねらいとして、初年度用テキストとの教学項目の連続性、および二次用会話教材と文法項目を一致させることにより、共通教育の中での語学教育に一貫性と連続性をもたせるということがあげられる。

このため、「初級」で必要な文法項目の構成を、『漢語課本』（2017および2018）では未習だった様態補語以外の補語構文、把構文、態の入れ替え、系統だった相の理解ということに重点をおきつつ、二次で学生の負担を減らすべく、『漢語課本II 試用版』の文法出現順序と一致させるように配慮しつつ本文を構成した。ただ、『漢語課本II 試用版』は新出単語や文法項目の出現順位やテキスト自体の難易度に細かく配慮して作られたわけではないようである（後述）。無理に合わせようとすると、講読テキストのほうの難易度順や項目がちぐはぐになってしまうため、可能ならば今後も継続して調整が必要である。

3.3 大学の研究教育の理念に沿う

福岡大学で作るテキストなので、できれば福岡大学の研究教育の理念に沿う形で構成したいと考えた。その各項目を以下のようにとらえた。

- ・「人材教育 (Specialist)」と「人間教育 (Generalist)」の共存
→人間の本質的な存在に寄り添った文章で、これからの生きる力を育むテキスト
- ・「学部教育 (Faculty)」と「総合教育 (University)」の共存
→専門教育への橋渡し、学際的な内容
- ・「地域性 (Regionalism)」と「国際性 (Globalism)」の共存
→中国語は世界の言語の中での話者数第一の言語なので試用範囲は中国だけにとどまらない

³ 千野栄一(1986)ではレアリアを「ある時期の生活や文芸作品などに特徴的な細かい事実や具体的データ」として英語のrealia「実物教材(日常生活を説明するために用いられる貨幣や道具など)よりも広範に定義している。小稿もこれに従う。

⁴ 公益社団法人著作権情報センターによると、2018年現在の日本および中国での著作権の原則的保護期間は50年である。個人の著作物は作者の死後50年まで保護されることを意味する。

英語のように、地球的な視野から中国語を学ぶ意義が問い直されても良い。さらには、福岡というアジアに向かって開かれた地で中国語を学ぶ意義を問い直せるようなテキストにする。

3.4 学び続けることのできるテキスト

テキスト作成に当たって、将来的には、希望すれば4年間学び続けることのできる教材の一つとしての位置づけを考えた。現在、二年次の第二外国語中国語クラスは人文学部でしか開講されていないが、その人文学部の学生の場合、共通教育外国語クラスのなくなった3年次以降も中国語を学び続けたいと訴えてくる学生が必ずいる。そのような学生のために、クラス修了後や卒業後も、将来的に独力で中国語を継続的に学び続ける意欲と能力、必要に応じて新聞や学術書、小説が読めたりするなどの情報収集ができる基礎体力に結びつくようなテキストを目指したい。

4. テキストの今後に向けた課題

ここでは、現在荒木雪葉と宮下のIIBのクラスにおいてのみ試験的に使用中の講読用テキスト『福岡旅情故事』（試用版）について、今後の課題および改善点を挙げる。

4.1 語彙

IIBは内容が今のままでは難しすぎる。二年次生のため検定4～3級程度向けに全体的にもっと難易度を下げ

るべきであるというご指摘を各方面からいただいている。そのため、各課で易から難への難度設定を段階的に設け、各学部間での学力差に配慮する。また、新出単語をもっときめ細かに書き出す必要がある。また、IIBテキスト中に出て来る固有名詞には、日本の地理歴史上固有名詞が多く、それらの多くは、漢字を中国語読みすることによって、中国語読みを覚えるというメリットはあるものの、HSKや中国語検定対策としてはほとんど役に立たないので、そういうものと、試験対策のために覚えたほうが良い単語は明確に線引きを行ったほうが良いのではないかと考えている。

すでに王2016でも指摘されているように、IABの登録語彙は準4級の語彙を80-90%カバーできる範囲である。IIAはどうかといえば、登録語彙は286であり、そのうちの10%ほどが『漢語課本』と重なっているため、実際の新出単語数は250程度である。これでは、2年間の学習を終えても、準四級の必須単語500に到達するのがやっとであり、四級の必須語彙1,000には遠く及ばない。また、いわゆる検定試験では必須の「成語」類がほとんど取りあげられていないのも問題ある。

4.2 文法配列

『漢語課本』『漢語課本II』との文法項目の擦り合わせを徹底することで学生の負担を減らすべきである。以下は、「ガイドライン』『漢語課本』（IAB）、『漢語課本II 試用版』（IIA）、『福岡旅情故事』（IIB）における文法項目の対照表である。

「ガイドライン』『漢語課本』（IAB）、『漢語課本II』（IIA）との文法項目対照表

級	「ガイドライン」文法項目	IAB 『漢語課本』	IIA『漢語課本II 改訂版』	IIB (2018 試用版)
1	発音	IAB 第1～5課		
2	動詞述語文（“是”を含む）	IAB 第6課		
3	連体修飾語を作る“的”	IAB 第7課		
4	動詞フレーズを目的語にとる動詞	IAB 第7課		
5	“有”フレーズ	IAB 第9課		
6	形容詞述語文	IAB 第10課		
7	比較（比）	IAB 第10課		
8	介詞	IAB 第11課		
9	時量補語	IAB 第11課		
10	連動文	IAB 第12課		
11	完了の助詞“了”	IAB 第14課		
12	語気詞の“了”	IAB 第12課		

13	過去の経験“过”	IAB 第 14 課		
14	様態補語	IAB 第 15 課	IIA 1	第 2 課 福岡和博多
15	処置文(把構文)	IAB 第 16 課	IIA 4,5	第 6 課 柳田神社和博多祇園山笠
16	結果補語	×	IIA 1	第 1 課 歡迎你来福岡!
17	方向補語、複合方向補語	×	IIA 2,3,8,10	第 3 課 近代建築 第 4 課 博多的美人魚
18	方向補語の派生儀	×	IIA 8,1	第 8 課 蒙古入侵和竹崎季長
19	可能補語	×	IIA 5,6	第 5 課 日本の茶祖栄西
20	受動態	×	IIA 6	第 7 課 博多の麵条文化
21	使役	×	IIA 8	第 6 課 柳田神社和博多祇園山笠}
22	アスペクト助詞“在”	IAB 第 16 課	×	第 9 課 菊池武時の起義
23	アスペクト助詞“着”	×	×	第 3 課 近代化建築
24	アスペクト助詞“起来”“完”	×	×※	第 4 課 博多美人魚
25	“有”連動文	×	×	第 10 課 太宰府和鴻臚館
26	存現文	×	×	第 14 課 江戸時代福岡藩の学問世界
27	状語をつくる“地”	×	IIA13	第 12 課 巖流島与手向山
28	反語	×	IIA13	×※※
29	感嘆文	×	IIA14	×※※※
30	× 条件文“无论”“不管”	×	×	第 11 課 玄界灘的守護神
※結果補語の“完”が第一課に出るが、アスペクトという概念を説明するための用例ではないので×とした。 ※※、※※※ IIB は書面語中心の講読テキストなので、反語や感嘆といった口語特有の表現は扱いにくい。				

これを見ればわかるように、IAB (2018まで) では処置文である「把」構文を扱っていたが、アスペクト助詞や補語、態にかかわる表現は扱っていない⁴。IIAではそれを補うように、補語(様態補語、結果補語、方向補語、可能補語)と現在進行の「在」、状態持続の「着」については一部記載したものの、その他のアスペクト助詞や連動文、存現文などの項目が扱われていない⁵。もっとも、IIAは会話のテキストであるので、詳細な文法項目はIIBで補完すれば問題ない。しかしその一方で、IIAには自由な会話や教室活動を促すような練習問題がないため、グループ活動や教室活動を行うには教師の裁量に依らなければならない⁶。一方で、中国語作文や並べ替えの問題が多く、人文学部とはいえ中国語専攻でない学生にとっては負担が大きいことは否めない。

4.3 文化的背景をもつ項目について

テキストのタイトルは「福岡旅情故事」としたが、これは福岡大学が福岡に立地していることに配慮したタイトルである。内容的には、福岡市にこだわらず、広く九州全域から題材をとってもよいのではないかと考えている。福岡大学の学生の半数以上を占める福岡出身の学生はよいとして、その他の学生を心理的に疎外することにつながることもあるかもしれないからだ。今回は、大牟田(近代建築)、熊本の甲佐(竹崎季長と蒙古襲来絵詞)、北九州(巖流島)、太宰府(宝満山、竈門神社)等の福岡市以外の場所も題材としてとりあげた。アジアと関わりがあった地域は福岡だけではないので、できれば、ひろく九州各地に題材を集めたいが、授業時間(前後期合わせて30校時)の制約があるので、14課以上増やすこと

⁵ 2019年度版から、「把」構文を削除して、結果補語を導入する予定である。

⁶ 上の表ではわからないが、IIAテキストでは文法項目の出現順序に関しても、方向補語や可能補語などを分散して扱い、一般化できる生産性の高い項目よりもはやイディオム化して生産性の低い特殊なパターンを先に挙げるなどの特殊な傾向が見られる。

⁷ このことは趙2016において、日本人の学生はグループ活動や教室内での対話活動を好まないため、敢えて教師から一方的に指名して語らせる形式を採用したと書かれているが、教師のほうから学生に話をさせる働きかけを諦めてしまっていることは否めない。結局、クラス活動を行おうにも、会話中心のテキストにもかかわらず会話の練習問題が無いという問題を抱えることになる。そのため、教師の裁量で活動をさせることになり、限られた時間内に、テキストを重視すれば活動の時間がとれない、会話を重視しようとするればテキストの練習問題に時間がまわせない。

はできない。今後より学生の共感を得られるテーマを絞り込んでいきたい。

一年時用教材の『漢語課本』および『漢語課本II』（IIAテキスト）では、中国人の留学生が登場するも、話題はほぼ教室活動や身の回りのこと、観光地の名称のみに限られていた。また、IIAテキストには「ケンタッキーフライドチキン」「マクドナルド」「スターバックス」等の多国籍企業の店舗が中国にも存在し、それらを中国語でどのように発音するかという情報を得ることができるが、福岡の文化を紹介する、地元の文化や食べ物に愛着を持つという視点からは改善の余地があるのではないだろうか。また、スマートフォンの普及を反映して、文字の入力方法やチャットについて語る課もあるが、『漢語課本』（IAB）において、わずか数年前の携帯電話やテレビの図画が2018年現在では既に過去のもの和我々の目に映るように、めまぐるしく進化するテクノロジーは教材としても劣化しやすいのではないだろうか。IIBテキストではこの点に配慮して、食べ物であれば、うどんや福岡ラーメン、屋台文化や祭事などの地元に着した文物の紹介を行い、また、同時に以下のように、中国との関連性についても論じるようにした。

- ・福岡と東アジアとのかかわり（第1課）。
- ・近代建築（第3課）、旧満洲国や台湾に残る近代化建築遺産との関連性。
- ・人魚伝説（第4課）、中国では『山海経』等に見える人魚伝説。
- ・禅宗、茶、栄西（第5課）、どれも中国とはたいへん縁の深い事物のものがたりである。
- ・聖一国師と伝統儀式（第6課）。
- ・福岡の麺類文化（第7課）、中国から伝来した福岡の食文化。
- ・蒙古侵入と竹崎季長（第8課）、中国の歴史的な王朝や非漢民族の支配について知ることができる。
- ・菊池武時の蜂起（第9課）、元寇のあとの鎌倉幕府の衰退を紹介することで、中国の動向が日本の政治にも影響を及ぼした例を知る。
- ・太宰府と鴻臚館（第10課）、古代日本の中国朝鮮との交流について知ることができる。
- ・巖流島、杖道（第12課、第13課）、武術の話である。中国の伝統武術と日本の武術や武道との違いについて議論し認識することができる。
- ・江戸時代福岡藩の学問世界（第14課）、儒教の受容をめぐって日本国内でも争いがあったことを知ることができる。

IABおよびIIBのテキストについて、中国事情の紹介がなされていないというご批判を受けることもあるが、仮に中国事情を中心とするテキストを編纂したとして

も、中国事情に関するあらゆる項目を一冊のテキストに収めることは難しいし、そのようなものはもはやテキストとは言えないだろう。学習した範囲でかわりのあることについて興味を持てることがあれば、学生が自分で調べたり、教員や学生同士、教員同士でも話し合いや交流を行い、少しでも知識を広げていく過程を大事にした。

5. まとめにかえて

現在、福岡大学において二年次の共通教育第二外国語の中国語では、IIA、IIBともに共通テキストが整備されつつあるが、IIAとIIBの役割分担の明確化、二年次修了後のレベルの確定とその保証など、解決しなければならない問題は多い。また、IIAがおそらく準四級レベルの文法項目と単語数にとどまる一方で、IIBの難易度の高さというレベルの不一致は、これら二つのテキストを今後統一テキストとして各先生方に使っていただく際の障碍となることは想像に難くない。どちらかといえば、IIBが難解な文章語に傾いていることのほうに改善の余地は多いにあるとおもえる。IIBはできれば3級程度の難易度まで抑えるように現在改訂中であるが、福岡大学の共通教育第二外国語の中国語を二年間履修して、中国語検定試験の何級が受けられるようになるかという見込みを含め、IIAとIIBのそれぞれのテキストのレベルの平準化を、共通教育の管理を統括する人文学部の教員の側から指導していただく必要があるだろう。今回は割愛した文法項目や単語のリストなどの詳細を含め、この問題については再度稿を改めて論じる予定である。

参考文献（アルファベット順）

- ・ 郭春貴（2007）「大学における第2外国語の中国語教育の位置づけ」広島修大論集48-1: 165-179。
- ・ 甲斐勝二（2003）「映像および画像を使った中国語教材『体会漢語』の製作をめぐって 福岡大学にてe-learningを考えるために」『福岡大学人文論叢』35-3: 1241-1258。
- ・ 甲斐勝二、磯田翌形、韋海英（2003）「資料 福岡大学共通教育語学中国語教育サポート教材『体会漢語』テキスト資料」『福岡大学人文論叢』35-3:1297-1328。
- ・ 甲斐勝二（2006）「福岡大学における中国語教育の現状と今後の教育構想について」『福岡大学人文論叢』38-1:313-337。
- ・ 甲斐勝二、間ふさ子、趙葵欣、荒木雪葉、宮下尚子、董玉婷（2017）「福岡大学の中国語教育と教育法の点検」『教科教育法 における情報機器活用指導の課題と見直し—各教科からの提案を通して

- 」『福岡大学教職課程教育センター紀要』2:220-226。
- 川澄哲也 (2016) 『『漢語課本2015』のピンイン表記について：福岡大学中国語教科書で用いるピンイン表記法の策定に向けた一作業』『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』15-2:21-27。
 - 孔子学院総部、国家漢辦編 (2014) 『国際漢語教学通用課程大綱=International curriculum for Chinese language education』(修訂版) 北京：北京語言大学出版社。
 - 町田茂 (2004) 「中国語教育と教材開発の課題」『教育実践学研究』9: 47-52。
 - 日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編 (2002) 『日本の中国語教育—その現状と課題・2002—』日本中国語学会。
 - 王毓雯 (2016) 「初級中国語教育で必要とされる語彙とその特徴 —福岡大学の統一教材『漢語課本』を素材に一」『福岡大学研究部論集A:人文科学編』15-2:29-44。
 - 王毓雯、甲斐勝二、間ふさ子 (2016) 「福岡大学の中国語教育をめぐる諸問題—共通教育中国語の質の保証について」『福岡大学人文論叢』48-1:199-234。
 - 塩山正純 (2017) 「中国語学習におけるレアリアとしての“口述実録(インタビュー)”活用について」『愛知大学 言語と文化』36:169-185。
 - 孫樹林 (2015) 「島根大学における初修外国語としての中国語教育のあるべき姿を探って 過去10年間の中国語教育を顧みて」『島根大学外国語教育センタージャーナル』10:159-165。
 - 山田敬三 (2005) 「中国語の環境：漢語学習50年の個人的体験から」『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』5-2:87-114。
 - 趙葵欣 (2016) 「初級中国語の文法項目について—福大の『漢語課本』を例として—」『福岡大学研究部論集A15 (2)』15-2:45-52。
 - 趙葵欣 (2016) 「日本大学公共漢語二年級教材編写的若干問題：以福岡大学<漢語課本2試用版2016>為例」『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』16-2:1-15。
 - 趙葵欣 (2016) 「日本大学公共漢語二年級教材編写的若干問題：以福岡大学<漢語課本2試用版2016>為例」『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』16-2:1-15。
 - 趙葵欣 (2017) 「二年級教材『漢語課本 II 試用版』的評価分析：以學習者反饋為依据」福岡大学研究部論集 A：人文科学編17-2:1-9。